

高齢者の口腔機能がサルコペニアと生命予後に及ぼす影響

著者	矢島 悠里
学位名	博士(歯学)
学位授与機関	日本歯科大学
学位授与年度	2016
学位授与番号	32667甲第1146号
URL	http://id.nii.ac.jp/1102/00000800/



高齢者の口腔機能がサルコペニアと生命予後に及ぼす影響

矢島 悠里

論文内容の要旨

本研究は、高齢者において口腔機能がサルコペニアの一因とされる低栄養と生命予後に与える影響を明らかにするために、地域在住高齢者 155 名(男性 38 名、女性 117 名、平均年齢 74.2±5.4 歳)を対象に身体機能、口腔機能、摂取食品、食品の摂取頻度変化、健康意識を調査し、口腔機能と健康意識が栄養摂取量や摂取食品の変化に影響を与えているか検討した。さらに、要介護高齢者 140 名(男性 49 名、女性 91 名、平均年齢 82.1 ± 7.5 歳)を対象に、舌圧を含む口腔機能が生命予後を予測する因子として有用であるか、日常生活動作(Activity of daily living: ADL)、併存疾患、認知機能、栄養状態、摂食嚥下機能、咬合支持、舌圧と 1 年後の生命予後との関連を検討し、以下の結果を得た。

1. 地域在住高齢者において、摂取エネルギー推定必要量未満の者が半数以上存在した。
2. 健康意識は食品の摂取頻度減少と関連を示した。
3. 咀嚼能力の低下と食品の摂取頻度減少は、サルコペニアと関連を示した。
4. 要介護高齢者において、舌圧は ADL、併存疾患、認知機能、下腿周囲長、食事摂取量、咬合支持と関連を示した。
5. ADL と舌圧は、1 年後の生命予後と関連を示した。

論文審査の要旨

本研究は、地域在住高齢者を対象に行った調査から口腔機能、サルコペニア、健康意識、食品の摂取頻度変化との関連を検討し、要介護高齢者を対象に行った調査から口腔機能と生命予後との関連を検討したものである。その結果、高齢者において、口腔機能はサルコペニアと関連を示し、健康意識が食品の摂取頻度減少を介してサルコペニアに関連することを示唆している。また、在宅療養高齢者においては、舌圧で示される口腔機能が身体機能と共に生命予後の指標となる可能性を示している。これらの知見は、口腔機能が高齢者において健康を維持するために重要であることを示唆するものである。

以上は、歯学に寄与するところが多く、博士(歯学)の学位に値するものと審査する。

主査 志賀 博
副査 五味 治徳
副査 今井 敏夫

最終試験の結果の要旨

矢島悠里に対する最終試験は、主査 志賀 博教授、副査 五味 治徳教授、副査 今井 敏夫教授によって、主論文を中心とする諸事項について口頭試問が行われ、優秀な成績で合格した。